

船団

●第96号 特集Ⅱわが町のとっておき



会員作品



坪内 稔典

山羊遊ぶかりんの熟れる音がして
あぐらにはマツカリ窓には凍てる星
カステラも冬のベンチも端が好き
雪嶺があつて老人ころがって
老人が落ちる時雨がさつと去る
老人も 目刺も 堅い冬日和
麩の菓子のおわふわを食べ十二月

中原 幸子

稲光干し椎茸がもどるもどる
天高し電気はうちで作ります
秋であるスープカレーの塩加減
ゆきずりの人と雲ほめ子規忌まで
窓側をどうぞ数珠玉2個どうぞ
煮麺のかまぼこピンク馬肥ゆる
呪ってるのと訊いてみる冬苺

火箱 ひろ

秋夕焼これから夜の国いくつ
人として猫として月夜を歩く
月照らす窓に中也と泰子の日
立て福助歩けペコちゃん夜は長い
明るみてかさど紅茸こそと初茸
今生の日溜りであり鬼やんま
地学部の部室はカオス稲光

陽山 道子

茅葺の萱を繕う秋の蝶
水澄んで名前呼ばれたような気が
誰も誰もか対岸の曼珠沙華
木の実降る全員集合起立礼
秋澄んで稚児行列のしんがりに
柿の実の真つ赤な方を投げ渡す
鴈鳴いてビュッフエの船を壁に貼る

ふけとしこ

在祭笹に祝儀を結はへ来る
鯉の子の跳ねても見せる浦祭
蒼天や巻き上げられて鱚網
風船をきゆきゆと振つて花野かな
野菊の道竹一本で閉ざされて
日がな雨狐の絵筆といふ茸
罨の真ん前猪の荒らしたる

塩見 恵介

アロハシャツ鳴けば鶏とさか揺れ
いつまでも残暑のことをラジオかな
秋風や灯台育ちの猫同志
暖かな煉瓦となつてうづくまる
無花果はジャムにあなたは元カレに
鏡台に焼き芋を置く魔女度ゼロ
廃校に抜け穴多し蓼の花

静 誠司

セクシーに見えなくもないでも南瓜
南瓜煮る腰はくびれてませんけど
腹筋が割れてなくても盆踊り
月を描くヒゲを付けたくなって描く
体幹の鍛え抜かれている案山子
冬めいてきやりーぱみゅぱみゅのぱみゅ
インプットアウトプット石焼芋

津田このみ

初雪や立ち上がるときゆっくりと
落葉焚境界線のゆらゆらす
男から一語こぼるる帰り花
雪こんこゴメンと決して言わぬ人
抱擁は短くそして木枯へ
勾玉のかたちで眠る寒夜かな
丹田にふわっとちから花八つ手

谷 さやん

秋風や口のかぎりのあくびして
鯛雲窓に足場の現れる
十月や紫いろの殻うすし
秋の浜は大きなノート愛記す
散らばつて友は貝殻秋の暮
髪切つて十一月をよく遊ぶ
冬の草鞆に飴が殻ばかり

星野 早苗

人はいさ我には甘き李かな
象の踏む象の足跡花アカシア
裸だがどうせ夢だと高を括る
人は尾を失ひて立つ捕虫網
秋の蚊に食はるユダヤの墓地を出て
木の実降る森の真中の赤ん坊
もはやこれまでと梨の皮落ちる